

Interview 06 Hirotoshi Furuya

アーティストから見る日本のPAエンジニア

音楽を本当に理解しているか

本業はテノール歌手ですが、PA・レコーディング・マスタリングの仕事をすることも多いです。アーティストかつプロデューサーとしてPAやレコーディングエンジニアというスタイルは欧米ではメジャーなんですよ。

PAは一言で言うと“女房役”ですが、欧米スタイルが日本と決定的に違うのは、自分自身も演奏するので、音をアーティスト視点で作っているということです。日本だとエンジニアリングで止まってしまっているため、音楽自体を勉強していなかったり、まったく知らない世界に触れているにも関わらずインターフェースの部分だけで完結してしまっていたりと、方向性がズレていることも多い。

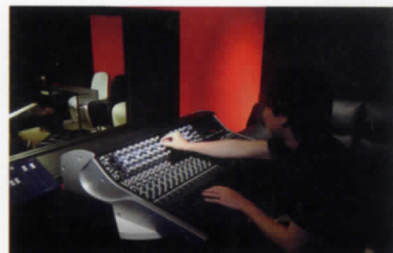
僕の考える“優れたPA”は、自分も音楽をやっている人が多いです。つくり出す音が繊細なんです。逆に自分で演奏しないPAは音が大きすぎる場面に遭遇する。こんなにデカイ必要があるかというくらい。例えば、ボーカルが聞こえなくなるくらいにバンドの音が大きかったり、ドラムばかり聞こえてきたり。僕はあくまでも音楽をやっているの

あって、サポートする側も音楽をしっかり理解しておくべき。加えて、探究心を持つことも大切です。より深く音楽を知ろうとすることを、技術的側面からできない、ダメだと諦めてしまうことは成長を止めることにはかなりません。

世界の動きに目を向ける

こんなことを言うと元も子もないですが、才能がものを言う世界であることは事実です。例えば、昔からあるヨーロッパのサル・プレイエルやアメリカのカネギー・ホールは音響測定ができない時代に職人たちの感性だけで作られていて、意外にもそれが音響面でパーフェクトだったりするんですよ。それに対して、日本で測定しまくって建てたホールが良い音がしないという例もあって、数値上で表されるものと感性が合致しないことはあります。PAの仕事でも感性は大事ですね。

音響機材に関して言えば、日本に入ってきてない良い製品・メーカーは多いです。日本は新興メーカーを嫌がる傾向がありますからね。SSLやNEVEなら安心、みたいな。もちろんスタンダードな機材として有名どころを使いますが、い



ま世界を見渡せば、第一線で活躍するような人たちはほとんど新興メーカーを導入しています。音響系は比較的資本を必要とせず開発でき、小資本だからこそ色々なアイデアが出せるしチャレンジができる。素晴らしい発想力を持った音響機材が世界にはたくさんあるんです。

音楽の世界でも、音響機材の世界でも日本は遅れている、というガラパゴス化が進んでいますね。まったく別路線というか、もっと全世界に目を向けてもらいたいという気持ちはあります。



古屋 博敏 氏

アーティストピアノサービス(株)

テノール歌手／サウンドプロデューサーとして世界中で活躍するかたわら、バークリー音楽大学とハーバード大学に在学中。趣味は知らない音響機材を探ること。東京都出身。

チェックCDはTOTOの「Falling Between Live/Pamera」、II Divoの「Greatest Hits/My Heart Will Go on」。

サル・プレイエル○フランス・パリにあるコンサートホール。1927年に建設。

カーネギー・ホール○アメリカ・ニューヨークにあるコンサートホール。1891年オープン。

SSLやNEVE○Solid State Logic社とNeve Electronics社。ともにイギリスの大手音響メーカー。